

らず。而して蒲昌海、輔日海、牢蘭海、臨海等は、古へ羅布を呼ぶに最も普通のものなるは、普く知悉せらるゝ所なりとす。されば李柏が焉耆慰撫の爲に西に来るや、まさに羅布泊の頭邊を經、此處に書を草して其王に致したるものなりとす。茲に於てか余は此事實の上に立ちて、此一葉の文書の示す所が、實に此地方の歴史地理の上に、一大光明を附與するものなるを云はんとす。

抑も羅布泊の位置に關する問題は、曾てプルジェヴァルスキー (Prijevalski) 氏が其探檢によりてカラブラン (Kara-bulan)、カラコシュン (Kara-koschun) 兩湖邊の地なるを説きてより、リヒトホーフエン (Richtofen) 氏は地理學上の理論と、古書の示す所とを以て之を争ひ、更にプルジェヴァルスキー氏の駁論あり、近くヘディン氏亦之が斷定を試むるありて、東洋地理上の一問題とする所なり、然も兩晋の時代之が如何なる位置に存せしやは到底此等の議論を以てしては明確に知り得べきに非ず。而して此文書は野村氏の言によれば、橘氏がコンチダリア (Kontsche-daria) 下流の一廢墟にて發掘せるものなりとす。圖を按ずるに(別圖參照)此河は巴格喇赤庫里の西南端に發して、大體に於て西南の方向を取り、庫爾勒 (Korla) を經て、北緯四十一度五分の二の邊より轉じて東南に向ひ、チケンリク (Tikkenlik) の北方にてマルタククル (Maltakkul) なる瀦を生じ、水の大部は再び之を出でて一部はタリム河 (Tarim) の支流コクアラ (Kok-ala) に合してクンツェキイシュタリム (Kuntschekischtarim) と稱し、一部はツイヴィリク (Tschivillik) 湖に入りて更にタリム河と合し、又一は直ちにタリム河と合す。而して其餘はイレク (Ilek) 河となりて東南に流れ、終にヘディン氏の所謂北方羅布泊 (箇所によりて Avullu-köll, Kara-köll, Tajek-köll, Arka-köll 等の名を有する一帶の湖) に入るものなりとす、(Hedin: Durch Asiens Wüsten II. S. 141)